

熱い秋

服部佳

三笠書房

熱い秋

定価 九八〇円

一九八〇年十一月十日 第一刷発行

著 者 服部佳・瀬戸春生

発行者 竹内肇

発行所 株式会社三笠書房

東京都新宿区戸山町三五

電話東京二〇三局七七八一〈代表〉

振替東京三一〇二二〇九六

郵便番号 一六二

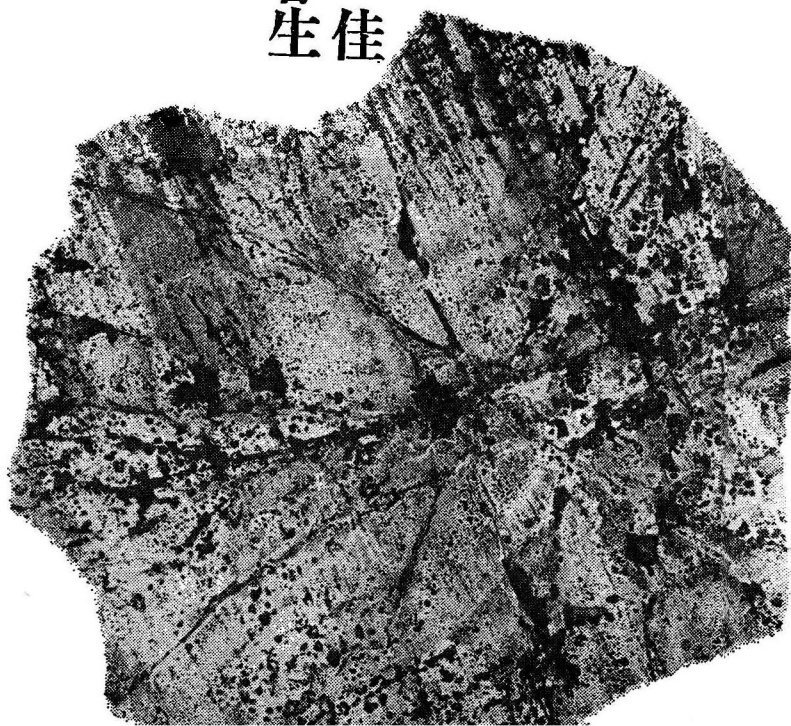
落丁・乱丁は本社またはお求めの書店でお取替えます。 誠宏印刷・若林製本

©Kei Hattori Printed in Japan, 1980

0093-001209-8001

熱い秋

服部 佳
瀬戸 春生



熱い秋

目次

第一章 不信

7

第二章 それぞれの夜

53

第三章 愛の虚構

101

第四章 黒い影

159

第五章 冬の嵐

209

熱
い
秋

第一章 不信

緑の芝を敷きつめた庭先にポプラとユーカリの大樹があつて、たえず白い葉裏を見せて風にそよいでいる。

もともと樹木の多い街だから、どこを歩いていても木の葉のそよぎと葉擦れの音がある。さわさわと無数の葉の擦れあう音そのもの、街全体の通奏低音になっている。

葉末から降り注ぐ陽光が眩しくて、綾は目を閉じたまま小さく身じろぎをした。それでも光は執拗にまぶたを狙ってくる。まぶたの裏が薄赤く染まるのを感じて綾はもの憂く左右に首を振り、目を開いた。

「目が覚めたかね」傍の信之が優しく問いかけてきた。

「あたし、いつの間に眠ったのかしら」綾は窓の外に目をやった。

手を伸ばせば届きそうなところに淡い綿雲が点々と浮かんで、機が進むにつれて太陽の光を遮ったり解き放したりしている。木洩れ日と思つたのはあれだったかと、綾はすっかり現実立ち返った。

「どうかね、四年ぶりに見る日本の空は」

「あら、もうそんな時間？」

「あと三十分もすれば成田だ」

「そう……やっと帰ってきたのね」その言葉に、自然に感慨がこもった。

「やはり、長かったろうな、きみには。こっちは、それでもちょくちょく会議だのなんだのといっって呼びつけられていたから、適当に息抜きもできたが……。よくやってくれたと感謝してるよ」

「そんな感謝だなんて……いやだわ」綾は、はにかんだ笑みを洩らした。

「今度のことは、みんなあなたの努力のたまものよ。昨夜だって専務の武井さんが、わざわざお電話をくださったくらいですもの」

「あれにはおどろいたな。まさか武井さんがじきじきに電話をくれるとは思わなかった」

「それだけ、あなたの功績が認められたということよ。そうでしょう？」

「まあ、そういうことかな」信之は、この四年のあいだにすっかり日灼けして、温厚ななかにもどこか逞しさを感じさせる顔を満足そうにほころばせた。

大日商事といえば、世間に名の通った総合商社のなかでは一流のBクラスだが、資源開発部次長の肩書をもつ加納信之が妻の綾を伴ってアフリカへ赴任したのは、いまから四年前のことだった。

信之に課せられた任務は、原子力エネルギー時代を先取りして、現地にウラン開発の合併会社を設立することだったが、この計画は当初からかなりな困難が予想された。この種の計画に

は大なり小なりつきまとう国情や習慣の違いはもちろんのことだが、相手国がいまだに厳しい人種差別を行なっている白人支配の国で、白人以外の人間は行動が著しく制限されていた。

有色人種のうち、日本人だけは特例として白人なみに扱われることになっていたが、それとても相手国の経済上の便宜からのもので、法律で身分を保証されているわけではなかった。ホテルに部屋ひとつとるにも日本人であることを証明しなければならぬし、経営者なりフロント係なりの意向によっては、いくら身分証明書を振りかざしても冷たく門前払いをくわせられる。

そうした、いわば閉ざされた社会に「黄色い人」という不利な条件を背負って分け入り、一つの事業を完成させるのは生やさしいことではない。

その困難な仕事を、信之は任期満了の間際になってようやく成し遂げたのだった。だから二人の今日の帰国は、大目商事にとってはもちろんのこと、世田谷の留守宅で両親の帰りを待ちわびている洋一にとっても大いに喜ぶべきことだったし、だれよりも信之と綾こそ、晴れがましい祝福の気分を満喫することができたはずだった。

しかし、いまファーストクラスのシートに陸まじく綾と肩を寄せ合いながら、信之は、しだいに心が重く沈んでゆくのをどうすることもできなかった。それは、このところ綾と二人きりになるときまって襲ってくる居心地の悪さと、ある種の不快感だった。

合併会社の設立そのものは、思いのほかすんなりと話がまとまって、むしろ信之は拍子抜けしたくらいだったが、そのあと取り組んだウラン精製工場の建設用地の買収が予想外に手間どった。

信之はめばしい政府高官に働きかけて原住民の居住代替地を用意させ、用地の買収費用の他に本社の武井専務を口説き落として原住民に支払うための多額の補償金まで準備したが、住民はいっこうに応じようとしないう。

信之は直属の部下の瀬戸史郎に命じて、その理由を探らせるところ、意外な事実が判明した。用地の買収と並行してすすめているウラン鉱石採掘施設の建築現場で働く現地人労働者が、ひそかに反政府グループを結成していて、グループのうちの八人が、買収用地を含む地区の出身なのだった。

「つまり、その八人が陰にまわって住民たちを煽動しているのです。反政府運動の一環というわけでしょう」

「それは確かなのかね」

「間違いありません」

「厄介なことになったな」

「こうなったら、ちょっと手荒い手段をとるしかないでしょう」

「というと？」

「まず、問題の八人を解雇することです。次に用地買収法の適用を政府に働きかけて、住民を立ち退かせます」

「それじゃ、強制執行じゃないか」信之は驚いた。

「いくらなんでも、それはまずい。そんなことをしたら、ますます住民の反感を買うばかりじゃないか。それに……」

「なんでしょう」

「いや。……しかし、弱ったな」信之は、考え込んだ。

もともと信之は現地の住民に同情的だった。白人たちの豪華な生活ぶりに比べて、原住民たちのそれは悲惨というしかない。街ははじめからヨーロッパ人のために建設され、アフリカ人やアジア人の住宅地は遠く郊外に移動させられている。とりわけ肌の黒い原住民は居留地に押し込められて「移動の自由」を奪われ、食事といえはくる日もくる日もトウモロコシばかり。世界一といわれる白人たちの生活水準は、そうした底辺の「肌の色の違う」人びとによって支えられているのだった。

そうした特異な社会のなかで、信之たち日本人は「白人に準ずる者」としての待遇を受けているが、これも微妙な立場だった。いいかえれば、信之は白人でもなければ同じ肌の黄色い中国人や韓国人とも違うというわけで、仕事をすすめる上では確かに有利だが、ひとたび仕事を

離れると、信之の心情は有色の肌をもつ人たちに傾かないわけにはいかなかった。

「所長の気持はわかりますが」瀬戸史郎は促すようにいった。「いまは、あれこれ考えているときではないでしょう。なにしろ時間がありませんから」

瀬戸のいう時間とは、信之の任期を指していることは、信之にもよくわかっていた。

「あと半月で帰国でしょう。十月の下旬というところ、日本は秋ですね。いいだろうな、日本の秋は」そういつて瀬戸は目を細めたが、すぐに実務的な表情に戻った。「半月のうちに用地を手に入れるには、強制執行しかありませんよ」

「わかってはいる。しかし、それで反政府運動も潰れることになるな」信之はかすかに額を曇らせた。

むろん、積極的に反政府運動を支持するつもりはないが、そのような運動が起きて当然だとつねづね信之は考えていた。同じ反政府運動といっても、大手町あたりのビルに爆弾を仕掛けるような連中とはわけが違う。掌一杯のゆでたトウモロコシに岩塩をふりかけるだけの朝食を、親子何代にもわたって強いられてきた人びとだった。

「できることなら、そういうことにはかかわりたくないんだがね」

「なあに、あんなものはいずれ潰れるんです。この国の秘密警察は凄いですからね、とうに嗅ぎつけていますよ。この国で解放運動が成功するには、あと二十年、いや三十年はかかるんじゃないですか」瀬戸はこともなげにいつて、「そんなことより、本社では所長の在任中に用地の買収を完了するのは無理だろうという声も出ているそうじゃないですか」

「なんだって？」信之は瀬戸を見つめた。

「きみは、どこからそんなことを聞いたんだ。本社のだれが、知っているのかね」

「いえ、だれといつても……。これは、まあ噂ですから」信之の氣勢をはぐらかすように、瀬戸はあいまいな笑いを浮かべた。

「しかし、考えてみれば、所長はもう充分に功績をたてていますからね。ウラン鉱石採掘施設は九分通りできあがっているし、用地の買収も、あとは詰めただけだから、所長が手を下すまでもなく、後任のだれかにやらせればいいわけです」

「もういい、わかった」信之はうるさそうに相手の言葉を遮った。

この男は俺を煽ろうとしている。後日、あの用地買収は自分の手柄だったと本社の連中に吹聴するつもりだろうが、用地の買収を実行するのはこの俺だ。

二日後の早朝、広大な買収用地の東の端に三台のブルドーザーが現れ、土壁にトタンを乗せただけの家々を突き崩しにかかった。住民たちに何の事前通告もなかった。ブルドーザーの先頭に立った男が、「今から家を壊す。すぐに外へ出ろ」と叫んだだけだった。

ブルドーザーの唸りと共に次つぎに立ちのぼる土煙りの中を、女や子供たちが逃げまどうありさまを、信之は遠く離れて停めた車の中から見た。ブルドーザーを運転している男たちは、目の前で次つぎに家突き崩されながら抗う術もない人びとと同じ肌の色をしていた。

その夜、信之が帰宅すると、綾が蒼白な面持ちで出迎えた。家の中に使用人やメイドの姿が